

# 新たな研究領域開拓を目指す意欲作

佐藤 晴彦

本書は内田慶市著『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部、二〇〇二）に次ぐ、著者二冊目の研究論集である。僅か九年で二冊目の研究論集を出版できたということからも著者・内田慶市氏の研鑽ぶりが伺える。

本書は、「序論 中国言語学における周縁からのアプローチ——文化交渉学の一領域として」、「第一部 周縁における中国言語研究」、「第二部 図像から見た近代東西文化交渉」の三部から構成されている。

## 序論

序論では、「文化交渉学」という新たな研究領域確立を高らかに宣言し、「周縁」と「中心」、「個別」と「一般」、「特殊」と「普遍」の関係を、圧倒的な迫力とた

たみかけるが如き筆致で論を展開し、その中から本書執筆の趣旨を理解し、以下の内容を概観できるようにになっている。ならば「文化交渉学」とはそもそも何ぞや？ 先ずは著者の主張に耳を傾けてみよう。

## 〇. 一 「文化交渉学」とは？

「従来の文化交流研究が、たとえば日中交流史という場合、二つの国家単位の日シヨナルな研究枠組が前提となっており、研究領域・分野においても、言語、思想、民族、宗教、文学、歴史など学問分野ごとの知見が個別叙述的に蓄積される一方で、文化交渉の全体像を把握する方法が欠如していたのに対し、私たちの提唱する「文化交渉学」では、国家や民族、更には個別学問分野という単位を超

内田慶市著

文化交渉学と言語接触

——中国言語学における周縁からのアプローチ



A5判 358頁  
関西大学出版部 [4200円]

えて、東アジアという一定のまとまりを持つ文化複合体を想定し、その内部での文化生成、伝播、接触、変容に注目しつつ、トータルな文化交渉のあり方を複眼的で総合的な見地から解明しようとする新しい学問研究である。」（三頁）つまり、「交渉」というからには必ず二つ（あるいはそれ以上）の国家が想定されるわけだが、その二つの国家の「交渉」のみを問題とするのではなく、東アジアをトータルに把握しようという試みであり、壮大なスケールで研究を推進しようというわけである。

## 〇・二・一 「周縁」と「中心」

そして、この壮大な構想を実現する方法として「周縁アプローチ」を採用するというのである。では「周縁」とは何か？著者は言う、

「さて、ものごとは「中心」だけを見ていては、その「本質」をつかめないということはよくあることである。台風の目の中にあつては風はなく、その「周縁」にこそ風は吹くものである。まさに古人はうまく言つたもので、日本には「灯台もと暗し」あるいは「岡目八目」という言葉が、中国にも「当局者迷、傍観者清」、「不識廬山真面目、只緣身在此山中」などという俗語が残されている。」(四頁)と、「中心」のみを見ていたのでは、却つ

て見えるものも見えなくなるという警告を発する。

## 〇・二・二 「周縁」と「中心」、「個別」と「一般」、「特殊」と「普遍」

著者はさらに続ける。

「周縁」と「中心」という関係は、また、言語学での「個別」と「一般」あるいは「特殊」と「普遍」という関係とも相通じるものがある。結論から言えば、両者はおのおの相対立するものではなく、相互に補完し合うものであり、「あれかこれか」の関係ではなく、「あれもこれも」という関係にあるべきものである。

ところが、多くの言語学者は、個別言語学(たとえば中国語学、国語学、英語学など)を研究する者は、個別言語研究

だけに止まり、他方、一般言語学者は、

一般言語学が指導理論であり、一般言語学で以て全ての個別言語の諸問題を解決できるといふ一種のうぬづれを持っている。(一〇、一一頁)

と、現在の言語研究のあり方を厳しく批判する。

著者は国語学者・時枝誠記の、「普遍と特殊とは、両々相対立した形に於いて存在してゐるのではなく、一切の特殊現象は、その中に同時に普遍相を持つといふことは、國語に於いてばかりでなく、一切の事物について云ひ得ることである。國語についての特殊現象の探究は、同時に言語における普遍相の闡明ともなり得るのである。」

## 蠟人形・銅像・肖像画 —近代中国人の身体と政治—

遊佐 徹著 他者の思想文化、論理、技術によって姿を写し取られ、蠟人形、銅像、肖像など様々な「像」と化すことになった林則徐、李鴻章、西太后等を通して、それら「像」が孕む「政治」と「身体」の関係を文化史研究の観点から解き明かす。

A5判 ■定価2940円

## 中国医学史 レファレンス辞典

《中医大辞典》編纂委員会編  
松岡榮志監修 中国医学文献研究会編  
中国古典医学に関する人名、書名、官職名五千項目を網羅。  
A5判 ■定価5040円

## 日中旅行史

30年  
1949-1979

大谷育平編 建国から30年の日中交流の歴史を旅行日程等、貴重な資料と折々のエピソードを交えて綴る。

A5判 ■定価3990円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋2-65-1  
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272  
http://www.hakuteisha.co.jp

という言葉業を引用しつつ、

「言語を研究する者は、個別言語を研究する者であらうと、あるいは一般言語学を研究する者であらうと、この時枝の「特殊」と「普遍」の関係をもう一度思い返すべきであらう。とりわけ、日本の多くの英語学者はこの言葉をよくよくかみしめるべきである。時流に乗って、構造主義言語学が主流の時はそれに倚りかかり、それが駄目なら変形文法に、それでも躓けば格文法に、そして昨今の認知言語学の大流行という具合である。」(十三頁)

と、英語学者にも遠慮なく、痛烈な批判をあげせる。

### 〇・二・三 「個別」Ⅱ「一般」あるいは「特殊性」Ⅱ「普遍性」

言語学は印欧語から生まれたものであるが、それが果たして「普遍性」をもつものか否かということにも著者は疑問を投げかける。

「印欧語では一般的に文には必ず「主語」が存在し、また、「主語」は通常は

動作主(仕手)である場合が多い。このことから彼らはア・プリオリ的に「文とは主語と述語から成る」と説明する。言語学の革命とまではやされ一世を風靡したチョムスキーですら、極めて当たり前のようにSⅡNP+VPを前提として文の分析を始めている。」(十五頁)

とチョムスキーまで一刀のもとに斬り捨て、返す刀で、

「しかしながら、日本語や中国語では必ずしもそうではない。日本語では「主語廃止論」といった論も主張されているし、中国語でも以下のような文は印欧語の「主語—述語」という関係では説明できないものである。(例文は一部省略した——評者)

前边来了一个人。(前から一人の人がやってきた)

玻璃碎了。(ガラスが割れた)

这里的水可以喝。(この水は飲めます) 下雨了。(雨が降ってきた)

「存現文」とか「自然的被動」、「主題化文」とか言われるものであるが、印欧語の「主語」、「述語」の概念の範疇では

収まりきらないものである。とすれば、この「文Ⅱ主語+述語」という規則は個別言語のものであって、言語の本質、言語の一般性とは言いがたいものとなるはずである。」(十五頁)

「文Ⅱ主語+述語」という「常識」ではこんな簡単に常用される中国語の現象さえ説明できないと鋭く切り込む。

### 〇・三 ではどうすればいいのか?

著者は「言語とは何か」という根源的な問いから出発すべきと主張する。

「中国語文法の研究などでも、極めて個別な現象に対する研究は深まり、確かにそれは一つの学問の進歩ではあるが、一方では、中国語の全体を見渡した体系的な「文法論」の構築が疎かになっている。そもそも、「文」とは何か、「主語」、「述語」とは何かという基本的な事項すらも説明されずに、二つの「了」がどうか、進行の「在」とは何か、「的」がいついらいぬ時とか、補語と連用修飾語の違いはどうかといった、個条的なものの寄せ集めになっている状況で

# 中国歴史・文学人物図典 中国神話・伝説人物図典 中国歴史名勝図典

瀧本弘之編著 西湖をはじめ歴史名勝・史蹟192  
箇所を、明清貴重書の図像で復元・解説。カラーク  
絵8頁・解題・出典・索引付。A5判・六〇九〇円



西王母（漢画像磚〈四川〉）

遊子館 107-0052 港区赤坂7-2-17  
赤坂中央マンション 304  
電話 03-3408-2286 FAX03-3408-2180  
http://www.yushikan.co.jp（税込価）

ある。何よりも「言語とは何か」という最も本質的な問いかけが抜け落ちてしまっている。言語観なるもの、大げさに言えば、世界観が欠如しているのである。これが本当に学問の進歩・発展と言えるのだろうか。」（五頁）  
確かに、著者の指摘する通りである。ただ、すべての研究者がこういうことを実践できるかどうかとなると、非常に難しいのではないだろうか。

○・四 新たな学問領域確立のための決意

「学問において如何なる本質論を採用するかといふことは、一つの賭である。（中略―評者）この賭は学者にとって恐ろしいことである。ここで怯む者は、十分検討もしないで当世流行の学説に身を寄せ、安心立命を得ようとするものだが、かかる主体性のない態度は学問の本道を行くものではない。」（鈴木覺「形式と機能の彼岸を衝く体系的文法論」『翻訳の世界』一九八二、六）（二五頁）  
自ら退路を断ち、新たな研究領域に敢然と挑戦しようという著者の意気込みが伝わってこようというものである。評者自身、本書を読みつつ、自らが組上に上らされているという感があり、思わず、背中に冷や汗が流れるのを覚えた。

序論についてまだ紹介すべきことは多いが、すでに制限紙幅を越えているので割愛し、以下第一部、第二部を簡単に紹介したい。

第一部 周縁における中国語研究  
ここでも紹介すべきことは多いが、紙幅の都合で二点のみ紹介するにとどめる。

一・一 十九世紀中国語文法研究の金字塔——Crawford『文学書官話』  
周縁からのアプローチを試みる著者の関心は、当然のことながら古くから言語学、文法学が確立された欧米人の研究に向かい、三十種にもほる文法書、教科

書類を研究対象に挙げる。うち、最も高い評価を与えているのが Crawford『文学書官話』である。著者によれば、『文学書官話』の優れた点は以下の三点に示られる。

(一)「本書ではこの「分品言」つまり「量詞」を独立した品詞としたことが極めて大きな特徴の一つである。」(九九頁)  
 (二)「……特に現在言うところの「連動文」の存在を明らかにしているのは注目すべきである。」(一〇二頁)

(三)「……中国語独特の「把字句」もその一つに数えているのは大きな特徴である。」(一〇三頁)

そして、「……総じて言えば、『馬氏文通』以前の一九世紀の最も体系的な中国語口語文法書であり、その意味ではまさに中国語文法において「金字塔」を打ち立てたものと言えるだろう。」(一一一頁)と総括する。

## 一・二 新たな資料の発見——畢華珍『衍緒草堂筆記』

新たな研究領域の開拓という使命を

自らに課した著者は、当然、あくなき探求を続ける。その結果新たな資料の発見にもつながる。例えば、畢華珍の『衍緒草堂筆記』。畢著は何群雄『中国語文法學事始』(三元社、二〇〇〇)で初めて学界に紹介された資料であり、これまで中国人による体系的な文法書の嚆矢とされていた『馬氏文通』、それより早く出版された中国人による文法書として注目されることになった。しかし、何氏は畢著の存在を指摘しながらも、自身は畢著者が発見したのである。その発見の経緯について、著者は、

「オーストラリア国立図書館所蔵のロンドン会蔵書目録 (Catalogue of The London Missionary Society Collection, Held by The National Library of Australia, 20013) というものがあり、その中に『論文淺説』という書名のものがあって、他の本と一緒にマイクロを請求したのだが、届いて中身をみて思わず身震いしたものだ。なんと、『論文淺説』こそ長年探し求めていた『衍緒草堂筆記』その

ものだったのだ。」(一一四頁)と述べている。この一節を読んだだけでも、同じ研究者として「ジーン」とする。『衍緒草堂筆記』の発見は偶然の所産と言えるかも知れないが、それとて著者のあくなき探究心があったので、その探究心に運命の女神がほほ笑みかけたに違いない。

## 第二部 図像から見た近代東西文化交渉

### 二・一 興味を魅かれるタイトルが目白押し

第二部は、各章のタイトルを見ただけでも「一体、どういうことが書いてあるのだろうか?」という興味をそそられるタイトルが並ぶ。曰く「自行車」(第一章)、曰く「光緒十六年のテーマパークと「自行車」(ジェットコースター) (第二章)、曰く「中国コマ漫画の濫觴」(第四章)、曰く「中国における「写真」——併せて「化学」という言葉について」(第七章)、曰く「防弾チョッキもあるでよ」(第八章)、曰く「鉄人一号?」(第九章)、曰く「時

計台…近代中国語における「時」の表現に関するノート」(第十一章)、曰く「X線の中国伝来」(第十二章) などなど、思わず食指が動くようなタイトル揃いで、評者が本書を初めて手にした時、ついつい第二部から読み始めたほどである。

## 二・二 「自転車」は「自転車」にあらず？

例えば「自転車」というタイトルは一見何でもないようなタイトルであるが、『諸器圖説』(一六二七年)に描かれた「自転車」は、実は「自動車」のことだったというから驚きである。では「自転車」が「自転車」の意味になるのはいつからかということが問題となる。著者の調査によれば、『教會新報』第二卷一九二(一八七〇年)や張德彝『歐美遊記』(一八六八年)に「自転車」の意味で「自転車」が使われているが、それが普及していたとは思われないという。それが証拠に一九〇二年から一九三六年に商務印書館から出版された英漢、漢英辞典類を閲しても「自転車」の意味では「脚踏車」や「自由車」などが使われており、「自転車」

はない(二五〇頁)。従って、「自転車」が「自転車」の意味として普及するのはさらに後ということになる。そればかりか「自転車」には「ジェットコースター」の意味で使われていたというから、驚きである(第二章)。

以上のように本書は、著者が新たな研究領域を開拓せんとする意欲に満ち溢れた好著と言える。ただ、中には原文の解釈に疑問を抱かせる箇所が少しあること、前著ほどではないが、若干誤植があることが惜しまれる。それとて本書の価値を貶めるほどのものではない。

内田慶市は原則にうるさい男である。研究姿勢で原則にうるさいのは本書が示す通りであるが、それは研究姿勢に止まらない。自身の原則を貫くためなら、市の教育委員会委員長、センター試験出題マニュアル作成責任者など、普通なら敬遠したくなるような仕事でも、進んで引き受けるというところにも表れている。B型肝炎を患い、胃がんにも侵されという肉体的には決して楽な状態でないはずだが、不思議に悲壮感は漂っていない。

それどころか、メールを出すと、しばしば「昨日からローマに来ています」「今、ドイツです」「明日から北京です」「明日日からマカオです」という返信がこともなげに返ってくる、まさに世界を股にかけた八面六臂の活躍をしている。病を病とせず、「原則を貫く」という自らの信念を、研究面でも実生活でも決して曲げないところに、内田慶市の生きざまを見る思いがする。

(さとう・はるひこ 神戸市外国語大学)

\*

月刊『東方』の定期購読をお薦めします

■A5判・本文六四頁／毎月五日発行

■年間購読料一、〇〇〇円(税・送料込み)

■お申込は郵便振替(〇〇一四〇一四一〇〇一 株式会社東方書店)まで。ご住所・お名前・何月号からご希望かを明記。

■Fujisan.co.jpにて、『東方デジタル版』が購読いただけます。http://www.fujisan.co.jp/magazine/128169037